

旅の陰画

ナショナル・テイルのヒロインの移動／不動

高桑晴子

ナショナル・テイルは、1801年のアイルランドのイギリスとの合同により連合王国が領土的に最大となったことに呼応するように生まれ、その枠組みは「異郷への旅」と「背景の異なる者同士の結婚」である(鈴木 338)。典型的なナショナル・テイルにおいて旅そして移動の主体はあくまでも男性であり、女性はその目的地として静的に存在する。しかし、Sydney Owensonはその後期のナショナル・テイルにおいてヒロインの立場を変化させている。一方、Jane Austenの*Emma* (1816)は、ヒロインにネイション意識を集約させたナショナル・テイル的な作品と読むことができる。本報告では、Owensonの*Florence Macarthy* (1818)と*Emma*を並べてみることで、旅の陰画としてヒロインの移動／不動を見、ナショナル・テイルの移動のロジックとナラティブについて考察していく。

Florence Macarthy は、主要な登場人物の正体が物語の後半もしくは終盤まで明かされないなど、その全容を掴むのが難しい作りになっている。主人公ははじめ Commodore とだけ称されるが、全4巻本の第3巻目でようやく南米独立運動の英雄 General Fitzwalter として知られる人物であることが判明する。そして、最後の巻でその正体が叔父によって幼い時にその地位と領地を簒奪されたアイルランド南西部 Dunore の正当な当主 Walter de Montenay Fitzaldem だと明かされる。同様に Fitzwalter の旅の道連れとなる M. De Vere も仮の名で、実際には Fitzwalter の従弟 Aldem Fitzaldem であることが第3巻で明らかになる。しかし、Fitzwalter の移動は、きわめて目的意識のはっきりとしたものとなっている。その移動は、ダブリンからキルデア、キルケニー、ティッペラリー州のホーリークロス、ゴールティ連山、ブラックウォーター溪谷近辺にあるとみられる Court Fitzaldem、そしてケリー州のディンクル半島に相当するとされる Dunore へと進む。この移動は第1巻でほぼ完了し、その間、彼は謎めいた Commodore として存在する。このことによって Fitzwalter の旅では、2つのことが達成される。1つ目は、英愛合同後のアイルランドの芳しからぬ現状を部外者の目で描く、という従来のナショナル・テイルの目的とするところだ。2つ目として、アングロ＝ノルマン侵攻から現在の英愛合同に至るまでのアイルランドに対する不正義を大きなコンテクストとして、Fitzaldem 家の不都合な歴史と、Fitzwalter 個人への不当を描き出している。主人公の旅は、アイルランド系領主として、アイルランドの「正しい」歴史認識と現状理解を獲得しつつ、失った領地の回復という目的に向かって進む。そして結末では、プロテスタント改宗を経てアングロ＝アイリッシュ支配層となった Fitzaldem 家当主が、ケルト系カトリック貴族の末裔であるヒロイン Florence Macarthy と結婚することで、「アイルランドのことはアイルランドにおいてこそ最善の務めができる」(367)という文化ナショナリズムの主張が達成される。

この意味で、Fitzwalter の旅は、ナショナル・テイルの原型である *The Wild Irish Girl* (1806)の Horatio 同様目的論的であり直線的だが、ヒロインのモビリティは大きく変わる。*The Wild Irish Girl* の Glorvina が Horatio の到達点としてコナハトの地に静的に存在するのに対し、Florence をはじめとする Owenson の後期のナショナル・テイルのヒロインたちは動的で、変幻自在だ(Takakuwa 31)。Florence は Fitzwalter たちがダブリンのホテルに到着したその瞬間から偏狭な老婆 Mrs Muguillicuddy として現れ、Fitzwalter を無事に Dunore まで送り届ける役割を担う。第3巻では、Macarthy 一族に残されたわずかな所領の若き女城主 Lady Clancare として彼らの前に現れるが、その際にも自らの素性を明かすことはなく、その軽妙な機知で Fitzwalter の身の安全を図る。それゆえ Ina Ferris は、Owenson のアイルランド人ヒロインは「パフォーマティヴィティの倫理を選択」し、「家庭の規範を逸脱した」モビリティとエージェンシーを発揮することができる(82)、とする。

しかし、*Florence Macarthy* においてはヒロインのモビリティとエージェンシーのもう一つの側面も見えてくる。Florence は、幼いころアイルランド人の祖父に育てられ、そのちスペイン人の母親の意向でスペインの修道女会に送られ、母の死後は軍人として南米独立運動に加わった父親に随行、その父親が Fitzwalter に命を助けられたことから父の意向で彼との結婚が決まるものの、結婚式の最中にスペイン軍が踏み込んできたことで式は中断し、アイルランドに舞い戻る。そして、スペイン軍の捕虜となっていた Fitzwalter が脱獄に成功しアイルランドに戻ってこようとしていることを知り、Fitzwalter の帰郷を助けての Florence のダブリンからマンスターへの移動が始まる。ヒロインの移動は本質的には周囲の状況に左右されている。また、そのエージェンシーも最終的には家父長的イデオロギーの枠内に収まる。Florence がその告白において強調するのは、彼女の「全能(omnipotence)」とも思えるその行為が Fitzwalter への妻としての愛のなせる業であり、「女の献身(a devoted woman)」「無私の心(disinterestedness)」「自己犠牲(power to abnegate self)」という美德に基づくものであるということだ(350)。つまり、彼女の移動は基本的に随行者としてのものであり、その旅への意思は他人(特に男性)の意思によるということでもまさにトラベル・エージェンツ的といえる。旅のエージェントではありながらも、その目的論的な旅の主体ではないという、Florence の両義的な立場は、ナショナル・テイルが根本に家庭のイデオロギーを持ちつつ、「異郷」＝ネイションというギミックがそのイデオロギーからのある程度の逸脱の可能にしていることを示している。

Emma において際立つのは、ヒロインの動かなさだろう。*Emma* はロンドンから 16 マイル、ホーム・カウンティの一つであるサリー州の *Highbury* から出たことはない。村からたった 7 マイル先の景勝地ボックス・ヒルも二十歳を過ぎて初めて訪れる。ここから明らかになるのは、アイルランドとイングランドのネイション意識の違いだ。アイルランドという土地が、旅する「部外者」の目を通して説明されその歴史や伝統が理解されなければならないのに対し、イングランドの村は説明抜きにそこにあればよい。*Brian Southam* の言を借りれば、「イングランドのナショナル・テイルは…今ここ、日常生活の観察の中、自分の戸口、自分の家」(194)にあるというのが *Austen* のナショナル・テイルへの応答となる。イングリッシュネスとは他人に対して説明するものではなく、そこにあるものであるというその意識が、そもそも *Emma* という小説から旅の必要性を取り去っている。

とはいえ、*Emma* において人は全く動かないわけではない。*Mr. Elton*、*Frank Churchill*、*Mr. Knightley* などを見れば、男性は移動の自由を確保していることが、ヒロインとの対比で浮かび上がる。*Highbury* のイングリッシュネスの価値を認識する役割が、男性にあるのではなく（ナショナル・テイルのロジックで言えば、*Frank* はその役割を担う属性を十分に備えている）、ヒロイン自身にあることで、*Southam* いうところの、動かずともイングランドはそこにある、という中心性が強調され、その閉じた世界観が強調される。

Emma の動かなさが抜きんでていることは、他の *Austen* の小説のヒロインはもちろんのこと、この小説の中の他の女性たちと比較しても明らかだ。*Emma* のライバル *Jane Fairfax* のことを考えれば、*Emma* の閉鎖性 (insularity) が強調される。両親の死後 *Campbell* 家に引き取られた *Jane* はロンドンで一流の教養を身に着け、ウェイマスで *Frank Churchill* と出会う。そしてあわやブリストル郊外に家庭教師として行きそうになっていたところ、*Frank* との婚約が明らかになり、今度ははるか 200 マイル離れたヨークシャーに拠点を移すことになる。*Jane* の移動は彼女の寄る辺のなさ、翻弄され具合を表すものだが、その一方で、その見聞、洗練にも寄与し、ヒロインに対抗する物語を提供する。*Knightley* 曰く、*Emma* が *Jane* を好きになれないのは、*Jane* が「自分自身がそう思われたいと願っている、真に教養のある女性」(178)だからだが、そのモビリティもその秘かな要因となっているかもしれない。*Emma* と同じくらいに移動範囲が狭いのは、*Miss Bates* くらいだということ想起してもよい。*Emma* はかなりの嫌悪感を *Miss Bates* に対して示し、*Harriet* から独身を通す可能性について「ミス・ベイツのようなオールドミスになるなんて！」(91)と言われたときには、自分は *Miss Bates* とは全然違くと猛烈な勢いで主張するのはこの点で示唆的だ。

このモビリティのなさが閉じたイングリッシュネスと重なった時に出てくるものが *Emma* の落ち着きのなさ (restlessness) ではないだろうか。*Emma* が誇るのは、自分の「活発で、活動的な精神 (active, busy mind)」だ (91)。部外者への説明が必要とならないイングランドのナショナル・テイルにおいては、「大したことは何も起こらない」ことがその本質となる (*Jones* 143)。*Emma* のテーマの一つは、*Emma* のマッチメイキングの失敗だが、それは、*Highbury* の何も起こらない空隙を、そして自らの物理的な不動を埋め合わせる作業といえる。*Emma* は、自らのモビリティに対する潜在的な欲求を *Harriet* で代償しているともいえる。それは彼女の *Highbury* 内の社会的ランキングへの執着とも絡み合っており (*高桑* 199)、その意味ではモビリティがもたらす変動に対する不安も見て取れる。不動を余儀なくされている *Emma* は自分のエージェンシーを確かめるかのように、マッチメイキングを通して自分が思い描く *Highbury* 社会を実現しようとしている、ともいえる。*Emma* は、ヒロインがマッチメイキングを通した徒らなモビリティへの欲求、エージェンシーの主張を脱し、*Knightley* を頂点とする比較的安定した *Highbury* の秩序の価値を見出し、その代弁者となると示すことで、イングランドのナショナル・テイルを成立させている。

※本報告は、JSPS 基盤研究(C)「ロマン主義時代のイギリス女性作家の小説における「ナショナルな想像力」」(21K00341)の支援を受けた研究の一部である。

Austen, Jane. Emma. 1816. Edited by Richard Cronin and Dorothy McMillan, Cambridge UP, 2005.

Ferris, Ina. The Romantic National Tale and the Question of Ireland. Cambridge UP, 2002.

Jones, Darryl. Jane Austen. Palgrave Macmillan, 2004.

Owenson, Sydney. Florence Macarthy: An Irish Tale. 1818. Edited by Jenny McAuley, Pickering & Chatto, 2012.

Southam, Brian C. Jane Austen's Englishness: Emma as National Tale." Persuasions, no. 30, 2008, pp. 187-201.

[Literature Resource Center.](#)

Takakuwa, Haruko. "Wild Irish' Heroines: Sydney Owenson's National Tales of the 1810s." Journal of Irish Studies, vol. 26, 2011, pp. 24-37.

鈴木美津子「偽装と隠蔽、混乱と錯綜——オーエンソンの『フローレンス・マカーシー』に見られるアイルランド表象」日本オースティン協会編『ジェイン・オースティン研究の今——同時代のテクストも視野に入れて』彩流社, 2017, pp. 337-55.

高桑晴子「小説への誘い——ジェイン・オースティン『エマ』を読む」日本英文学会関東支部編『教室の英文学』研究社, 2017, pp. 196-204.